

手のひらで

踊って

少年

溺れていく



寝ようとするととき、仰向けになると、みぞおち辺りに手の大ききくらの小人が見える。

ちようど、みぞおちに爪先を突っこむようにして、延々に片足で回っている。

なんとなく、バレエの動きと分かるそれは、調べてみたところ「フェツテ」というらしい。

片足を軸にし、もう片足で反動をつけて、最高では三十回くらい、ぐるぐるできるのだとか。

みぞおちの小人は、三十回どころか、俺が見ている限り、ずっと回りつづけ、片足を下ろすことはない。

細身で、あどけない顔をしているから、おそらく十代後半くらい。

ぴったりとした白のシャツと黒いタイツをはいた、その下半身への目のやり場が困る。

十八歳のころの自分なのだと思う。

「思う」と他人事のようなのは、十八歳以下の記憶がすっぱり抜け落ちていくからだ。

社会のルールや、世の仕組み、生活感覚や親の存在感、勉強による知識など、生きるのに基本的なことは念頭にありつつ、どこに住んで、どうやって暮らしていたのか、自分の名前も思いだせなければ、親以外の人間関係もさっぱり。

いつの間にか着替えていて、身につけているのは薄く張りつく白いシヤツに黒いタイツ。

でもって、目のやり場に困るそれ。

そう、俺はみぞおちの小人になっていた。

小人が昔の自分だろうと、見当をつけていたとはいえ、記憶がない分、しっくりこない。

とくに下半身の輪郭が、えげつなく浮き彫りになる黒タイツへの抵抗感がすさまじいし。

人の目がなくても、居たたまれなくて、太ももを閉じようとしたら、

阻まれ、むしろ広げられた。
ぎよつとして見たところで、半透明な肘から伸びた腕、その手が太ももを掴んでいる。

指で膝の裏をくすぐってから、手を滑らせて、股間をなぞった。
見えるのは半分の腕だけとはいえ、指一本で丹念に輪郭をなぞるのが、
嘲っているようで「う、ぐ・・・」と頬を熱くし、目に涙を浮かべる。

勃起不全のはずが、若返ったせいか、反応しそうになる。

とって、半透明の腕にかされるなんて、しかも黒タイツ姿でなんて、まっぴらごめんだったから、唇を噛んで堪えていたものの、すっかり失念していた。

腕が一つとは限らないことを。



セラピストは箱庭から

男の暴虐を覗く

案外、人は自分を客観視できない。

物事に対して「うれしい」のか「むかつくのか」のか「悲しい」のか「寂しい」のか。
把握しきれないこともある。

とくに負の感情は、抱えるのを避けたがって、見て見ぬふりをしがち。
とって、消えるわけではない負の感情は、積み重なっていくばかり
で、自覚しないほど、負担になってくる。

負の感情に過敏だから、心の病になるのではない。
逆に感知しないと、自分を守れなくなる。

たとえば、人と接していて、寒気がしたり、胸がむかむかしたとする。
相手の態度や物言いが、好ましくないと、そうやって体が送るサイン
を無視したら、どうなるか。

無防備のまま、心をずたずたに切り刻まれる。

好ましくない相手に、考えなしに寄りつけば、当たり前のことで「悪い人ではないから」と目を瞑ろうとする限り「距離をとる」「避ける」という、たった、それだけの判断もできないのだ。

そうした基本的な自己防衛をしないで、限界まで痛めつけられた人が、心の病になりやすい。

改善するには、負の感情と向き合わなければ、ならないとはいえ、普通の人でも、自分を客観視するのは容易くなく、訓練が要る。その過程に欠かせないのが、箱庭だ。

囲いが低い、オセロ板くらいの白く無地の箱。

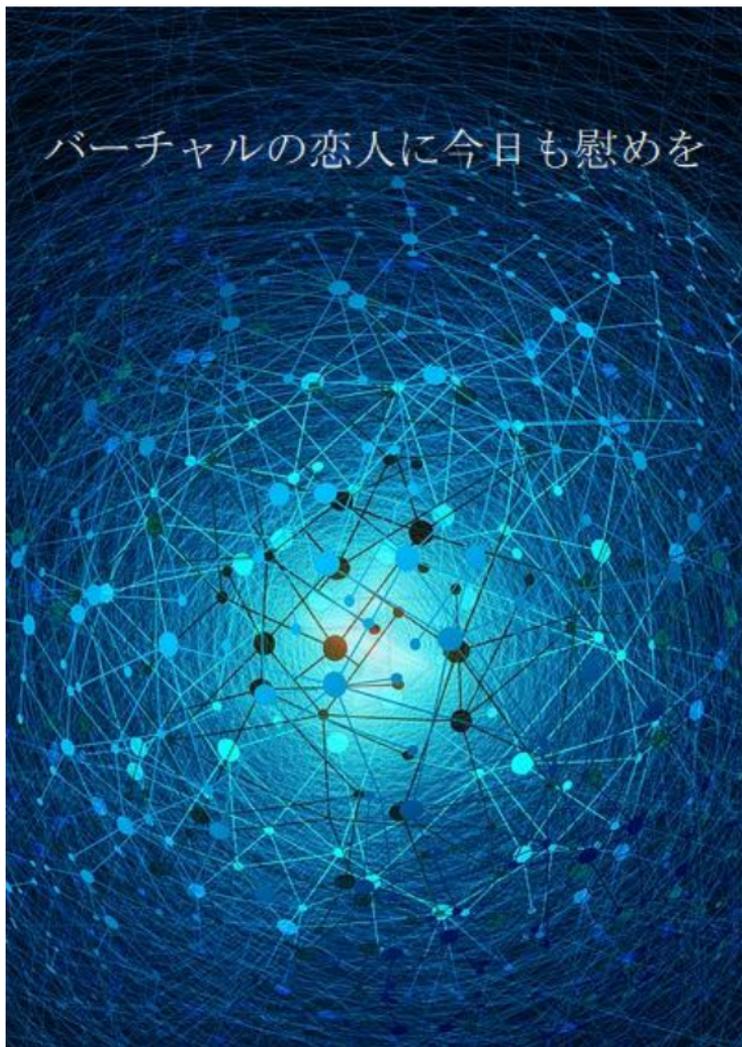
傍には、ミニチュアの家や家具、小物。子供、大人、老人といった人形や多種の動物、草木や花、石や砂などのオブジェが置かれている。

セラピストの私は、クライエントをリラックスさせてから「頭を空っぽにして、手が動くままに、装飾してくれれば」と空っぽの箱を差し出す。

絵の具、クレヨン、色鉛筆もあり、アイテムを使わずに、落書きをするだけでも、かまわない。

いわゆる箱庭療法だが、私の目的は、クライエントの心理を探るのでなく、クライエントに自分の心理を探る練習をさせること。

バーチャルの恋人に今日も慰めを



今時のアダルトゲームは、VRのソフトもあり、より没入感を味わえた。

さらに、今やプログラムではなく、AIがお相手をしてくれる。

俺が愛用の「アイちゃん」は、初期設定の見た目も性格も平均的で、これといった特徴はない。

ゲームをする頻度や時間、すすめ方、対応の仕方、エッチの仕方によって、個性が植えつけられていく。

おおまかに例えれば、毎日プレイする依存型には、サドなツンツンデレに。

週一くらいしかプレイしない、淡白型には、エムなかまってちゃんに、といった具合。

従来のゲームのように、女の子の設定をいじれないし、プレイを通して、好みのタイプにできるとも限らない。

最先端の技術、AIを用いながらも、中々、不自由なゲームだけど「神作」と崇める愛好家は数知れず。

案外、自覚していない理想を、AIが形作ってくれるのが、興味深く、満更でもないらしい。

俺はゲームをはじめて一ヶ月。

週の半ばと、週末に二時間ほど、ゴーグルを装着する。おしゃべりに割と時間を割いてから、そのままスムーズにセックスになだれこんで、事後も時間をかけ、いちやつくという、健全なプレイをしている。

まだプレイ時間が少ないのと、さほど癖のないプレイをするから、アイちゃんは初期設定とそう変わらず、シャイで大人しく、はにかむのが愛らしいまま。

自分の性格からして、乱暴にしたり、焦らしたり、赤ん坊のように甘えたり、極端なことではできなさそうで、アイちゃんとは清く正しい付き合いがつくものと思っていたが。

週末、休み前日の夜に、思う存分、プレイをしようとゴーグルを装着

したら、背を向けるアイちゃんの格好に異変が。

いつもは、清楚なお嬢様風の服装なのが、今日は黒のミニスカに、長くかかたが高いブーツ、三角の帽子を被っている。手に持つのは箒。

振り返ったアイちゃんは、スカート裾を引っぱりながら「ト、トリックオア、トリート・・・」と。

そうか、今日はハロウィンかと思いつつ「どうしよう、お菓子がなし」とマイクで告げる。

「じ、じゃあ、イタズラを」とおずおずと寄ってくると、口付けをしてきた。



泥にまみれて芸人は尻を掘る

今の世で、芸人の地位は向上したようで、どん底に落ちたと、一芸人として憂いている。

己の芸を貫こうとせず、スポンサー、テレビ局、視聴者に媚びへつらい、それぞれの都合に合わせて、こき使われているだけなのに、屈辱も覚えない。

人を笑わせるのではなく、人に笑われてナンボとばかりで、躰けられた猿のほうが、まだ矜持がある。

そういう芸人の風上にも置けない軟派者は「今の時代、芸人の仕事だ
けじゃあ、やっていけないから」とほざくとはいえ、世迷言に過ぎな
い。

そう断言できるのは、まさに「芸人の仕事」だけで、俺はやってい
ているからだ。

ピン芸人である俺、「涼風」の芸風は、漫談で世事を批評し裁くとい
うもの。

気の利いた嫌みや皮肉を混ぜて、笑わせつつ、世の中や社会にはびこ
る悪事や悪党を、情け容赦なく断罪をしていく。

ターゲットが、政治家や文化人、教授、大物俳優といった権力者だ
ろうが、大企業、宗教団体、果てには他国など、どれだけ大規模だろう

が、道を踏み外した暴挙をすれば「万死に値する！」と声高に死刑宣告してやった。

もちろん、風通しの悪い今の社会にあつては、公共性だの、差別だの、ハラスメントだの、エビネンスだの、コンプライアンスだのと五月蠅く、事務所を通してお叱りを受けたり、直接、圧力をかけられることもある。

が、庶民からは、さほど非難されず、案外、炎上することもなく、なんなら、一部には熱狂的支持者もいた。

やはり、世間に迎合せず、むしろ、俺についてこいとばかり、我が道を突きすすむ姿勢は、芸人として正しいのだ。

そこらの自称芸人レベルと違い、俺がワンマンライブを催せば、チケットは即完売。

ほぼ毎日、舞台に立っても、それでも、チケット争奪戦が起こるほどの人気ぶり。

テレビ出演をはじめ、パチンコでの営業や、グッズ販売、コメンテーターや俳優などジャンルの違う、片手間の仕事をしなくても、舞台の稼ぎだけで、十分に食っていける。

まさに「今の時代、芸人の仕事だけじゃあ、やていけない」ことはないと、身を持って証明してみせ、ひらすら舞台に力を注いだのだけど、俺にだって義理人情はある。

